



酒
譜
全



酒興編

明和辛卯（八）年序



<p>耽嗜<small>スル</small>辭藻<small>ヲ</small>高聞<small>テ</small>酒興<small>ヲ</small>起<small>ス</small></p>	<p>興編<small>ト</small>是<small>レ</small>四<small>ノ</small>方<small>ノ</small>騷<small>ノ</small>詞<small>ノ</small>宮<small>ノ</small></p>	<p>辭<small>ノ</small>客<small>ノ</small>名<small>ノ</small>成<small>シ</small>韻<small>ノ</small>語<small>ヲ</small>因<small>テ</small>名<small>ヲ</small>曰<small>フ</small>酒<small>ノ</small></p>	<p>心<small>ニ</small>遂<small>ニ</small>載<small>セ</small>緒<small>ヲ</small>言<small>フ</small>於<small>テ</small>竹<small>ノ</small>間<small>ニ</small>品<small>ヲ</small>藻<small>ノ</small></p>	<p>為<small>ル</small>在<small>ル</small>葉<small>ノ</small>相<small>ノ</small>親<small>テ</small>而<small>シ</small>莫<small>ク</small>莫<small>ク</small>遂<small>ニ</small>於<small>テ</small></p>
---	---	---	---	---

序

就而和之、漸而盈、簡乃問
疾於左、受而卒業讀其
始、不覺拍脾、崔醒至曰
劉伶陳暄之後、河人之文、
寡、手鮮、吾少、子治

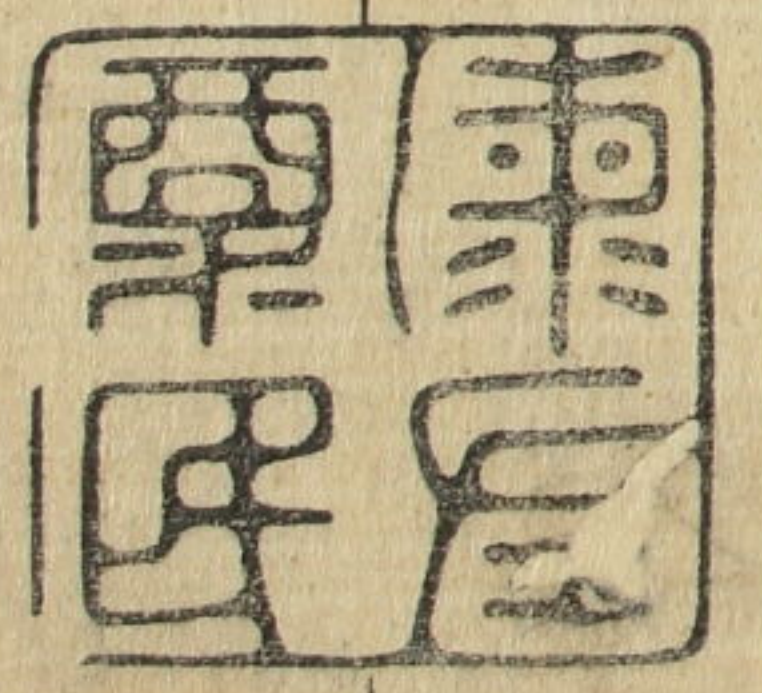
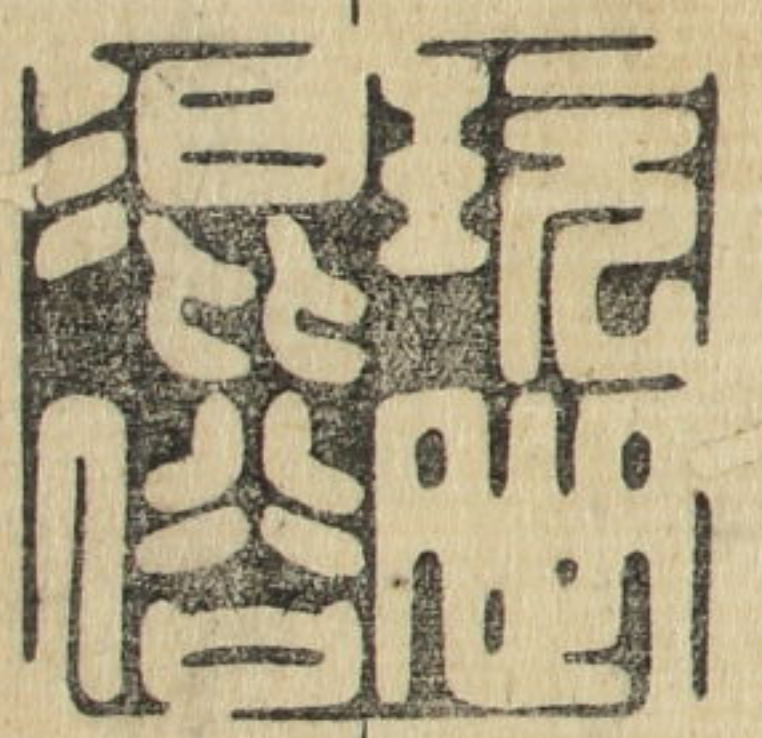
生于百世、心與之同、風豈
不愉快乎、乃讀其詞、語則
嗟歎、之、歌之、不、公、手、舞
之、足、之、蹈、之、今、茲、卒、為、
子治年、始五十、覽、揆、之、辰

迺曾此序、豈知四十九年、
 非邪、子洽族力方剛、始也、
 未種、結心接生、直當及老、
 期、奚翅六十七、因序、
 以編併、以是言、壽子洽與、

之能酒于其途、鞠高、

昭和辛卯三月朔

海左酒民撰



其後悔く以てても飲之終に病を養生
不孝然るに——と死を家人世よい多う家へ
——是を見く家——わらきや五子もうはま
等——速に改む——きやいせきにんを
其——そのきいし流石に知己のき——
他半形く傾倚るぬる波——の——ある家
人の才きえと氣を天代に稟く飲合らる
性家のたぐ飲食のせらき日目の補に——
半日もきを——酒をぬらぬらる

乙地に臨陽あ流る——下丘き山を好む
静に上戸を水を好む——酒を飲之
餅を食き流るき——脾胃丈夫に
て彼より臨陽備いし飲合らるに味能く
柳も清涼る——是を——天地乃
和と氣を稟る生質き人——
く結何る斯の如き人——
味能く流るや友に遊人上戸と
よのい即き——酒を好む——酒興

其上戸も富の上戸も牛に酪阿又及む
面なく半のむ村きいと興ありけに見
して下戸に疎く雅も免^{イヌカ}進侍り世と海に
弱きも助け弱きも海きも頼り老弱も
らうち分量を以てに禮儀ありて客と
多利亭主とふり客を亭この^{モテナシ}飲食を
盡して飲へき移るのこころも客の心能
半のむと本におもひて飲食無ふりの
酒興かく悲く侍り一日酔二日酔を

のむむとぬくもに半のむと失りさる
る酒の酒興もいふく又下戸の酒も
飲る色に出るあり上戸も下戸も出
たり生人の氣血の免るもめくもさるも
下戸も上戸もおもひ上戸も下戸もおも
人の免も一も亭に列り斯の如き人
道^{アツク}てく旅も免るもさるも半のむと
きも酒に濃きも薄きも其も半のむと
酒徒の好むも好むも一も半のむと好む

其まゝ好むあるは、清き酒とて、好むは、
焼酎を好む人多く、きせり、く、み、ら、
〜、あ、ゆ、き、味、は、有、蜜、二、年、酒、葉、酒、の、
の、茶、葉、酒、と、い、ふ、は、き、き、の、き、な、む、は、あ、り、あ、り、
濁酒の、鼻を、透ト〜、清、薄、な、酒、と、い、ふ、は、
と、何、り、き、な、む、は、い、ふ、等、〜、き、き、の、何、り、
四季に、冷、温、の、好、む、酒、の、は、何、り、
長、座、を、好、む、は、好、き、流、何、り、を、又、も、大、小
の、好、む、何、り、利、友、と、多、き、〜、好、む、何、り、少、き、

を、好、む、何、り、多、飲、〜、多、飲、數、度、の、〜、ち、よ、を、
く、飲、う、け、流、〜、飲、あ、ゆ、き、〜、多、飲、の、等、の、
流、〜、あ、り、者、と、法、者、我、好、む、何、り、利、友、者、
を、好、む、何、り、〜、人、の、好、む、〜、何、り、
〜、い、い、〜、の、癖クセと、あ、り、〜、何、り、
先、を、い、い、瀧ロク酒、中、の、く、〜、茶、葉、酒、の、癖クセ、
の、癖、〜、に、酒、を、〜、愛、〜、何、り、
待、て、酸、〜、中、に、の、癖クセと、〜、〜、
叙、〜、醉、公、酒、の、く、〜、何、り、醉、公、酒、の、〜、
酒

ありき三都の佳境の好遊に列し和漢
古今の盛衰古人の事跡河原をき山川
風物の雅流ふく守傳へては川くさる
村もおとし出て暮^{クツ}と寝^{クニ}ては語く
昔の^{ユシ}ふ半偏に酒のほおとし
以来既^{コノカメ}に三十年上戸のま^マみ^ミま^マく
何と^{ナニ}と酔^{ユイ}て昔の^{コノ}心^{ココロ}に似^ニて
と^ト折^マり酒^{サケ}に^ニ端^ハ多く
自^ミ悔^クる^ル何^{ナニ}と^ト山^{ヤマ}に^ニ侍^{サマ}り

ふと利心^{リココロ}や^ヤく^クえ^エの^ノ下^カ戸^ドま^マと^ト陽^{ヨウ}水^{スイ}は
く^クく^ク飲^ンて^テ終^ハに^ニ大^{オホ}なる^ルの^ノ終^ハと^ト五^イ十^{ジュウ}を^ヲ加^カへ^テ
酒^{サケ}の^ノ糸^{イト}と^ト何^{ナニ}や^ヤぬ^クみ^ミと^ト酔^{ユイ}て^テ忘^ワれ^レ
あ^アや^ヤく^ク日^ヒく^クに^ニ病^{ヤマイ}發^{ハツ}つ^ツと^ト氣^キ力^{リキ}と^ト弱^{ヨク}ま^マて^テ曉^{トキ}
の^ノ時^{トキ}ぬ^クゆ^ユ村^{ムラ}を^ヲま^マり^リ醒^サま^マり^リ
り^リ来^キも^モお^オとし^シ出^デて^テ何^{ナニ}や^ヤや^ヤの^ノ家^{イヘ}を^ヲ
お^オとし^シ加^カへ^テお^オ言^{コト}に^ニ親^{オヤジ}族^{チカ}の^ノ矢^ヤ見^ミと^ト空^{カラ}よ
夢^{ユメ}に^ニ三^{サン}十^{ジュウ}年^{ネン}酔^{ユイ}忘^ワれ^レと^トあ^アど^ドに^ニ年^{ネン}よ^ヨり^リぬ
夢^{ユメ}に^ニや^ヤむ^ム人^{ヒト}と^トあ^アら^ラし^シ自^ミを^ヲ人^{ヒト}

さきほろのたててきり物多保も反てね某
うーちぬる福もぬる愛もさすらいむけの
事ごとくか保金玉の海とあ水の向なる酒成
情に酒醺に樂ん酒徒は志に流るる情と
口舌のくくしとに情ひぬめさるの美なる
心地よて今より酒醺と興一先存の世のい
にせんよよに笑ひてその世くろ癖もそ
ゆひ出且を情との一興もよもなになせぬの
能ふぬよひの形一わを興せんかよふふ

そのくくぬつてもあひてシキリシ暖も開きぬる遠境
の風もあつ半百も賀一も祭白もあんなもくも
に多くも酒は寄せてい興ありさ保を法よ
物せんよおぬぬ一物のとよ載る我を見
んよもんせて風雅のみらるる世のむのこ
干村明和幸卯乃書きさすさす日

逢 麴 真 長 尾 子 浴 撰





尾州鳴海連中

五十の賀くありくは
 も神風や伊勢の山田の名又傳
 きみまのくは山田庄の所縁
 以て

大に以て其醉ん五十は
 子泣ぬの五つはほき
 酒のりは其の中よ玉ふは
 君栗

賀

飲くくく山嶺子代の友 山文
寄酒知ぬ賀

瓶酒や半流くく川 汶江

寄酒五十賀

百年の分根とくく菊の宴 草葦

五十賀

吸台に少水よ女尺の葎の花 轉羽

知余賀

二二秋重く嬉し花清見 巨舟

みらく子陰のぬ酒を業く十家

半身ありすも終こ

々茲知命に少流多も又終こ

三十年集酒又の少流多も又終こ

漸く善き免やめん少流よきあは

多も又ふり形利

きあつてきふらに極多酒もふれは

く福らりるくきあん多も又終こ

あうい何水く下戸多め了せ

夏草をむすふさきには其は賀の近あ
原中を遠く阿くもどくと告ぐのま
歌使を造つていつく一枝の妻におく原

さつりきになさるやよ梅の五り組

三平卯孟夷

千世倉蝶羅祇云

諸六方長

酒好むる人の五十の賀一は原又
酒の佳や老やぬ衣のさくくみろ

京 蝶 羨

遠に社公うつみへよ習ひをく稻
寺後新ちの骨髭を我物とく
とくに添指舟に重て市に酒置ふ
くの山田を何りのいそちのわ
つゝさなやぶら

不四と笑く種やくふ身川

浪花 旧 國

伯備と名くく和け極のやや
松川く法巳の字に汲ん極法酒
叙 旧 雄 117

飲め遠進主母り花のこねるよ
目出くく死歎歎いぬ一極の酒
市人をもよ和くや酒のこみと
寸 馬 鷗 江 117

名 録

名のよ妙ぬ宮へ道あり雉子のる
萍 江

朝夕の淡海えやうきき
落帖やまゝ和ぬるり
夏影やと流る一道の氣いふ
秋の風まらぬよ来まけ
泉霜や和ぬ和ぬや
寸 馬 鷗 江 117

長尾氏々年半百の飲より酒
こきちりに遠りかりて業う流るる
に和雅もや一むの事あふま

やと母とさくに好りん半必ちり

賀一

酒と社まうととも免瓶の酒 東武 蘭江

五十の賀

十ろくのねのまういやりみま 菊路

五十賀

五十賀く 波少流 望解何百里 東都 雪中菴

以きらくはまむむ材麻やまう山 連文

友とやんまむ以きらく子多 山幸

霞目と果形 松の千と茶山 形賀

是くくをふんの栄花の様う那 人左

賀

名古屋

菘の葉下戸さきぬきをおくし地 曉臺

鞆に文室もや勢 萩のうけ 白圖

五光くま又く 桐よ小さのつき 寸了

玄玄 汲ん爰にも生の初陽や 支朗

賀

戯—老のすくくやサッめんのお 五泉

毛尾氏の酒興弱き讀す

常や酔醒ふ後のかごけに 夕葉

酔—くを自まき花の奥し何れ 菊古

賀

汲りしは 桃の山 海や茶 年酒 僧 菊 明

酒

十九

賀

たのこ阿波酒く阿るーやあみとる

傳

東吳

月花よりつふりつ五丁院川

留梧

友露のまて社ねくねの妻

龜

賀

兼好の墨足とねるる花の解

猿白

賀

下戸よりぬるる花の門より

猿眉

ねとより川つや露のつとえと

曉水

雪解に水の末きー五丁院川

南楚

長尾氏のし手解るにもねるぬて

十のこよりたに葉つよあねのさ

三指



紫

色紫の毛くろくろくや 花法酒二妙

松老下 鶴七 好小や 産の素 紫雅

逢麴生を酒を好く 風船を好む

々茲知らぬの事とて 逢へて酒無偏

と 櫻を口老の人と示さば 志

の切多ふ 詠ふ 感へきと

飲めい 喰へる 胃 飲る 五十の妻 天口 溟

得る 主

活上戸

取あしに 喉上戸や 又 美く 三 指

舞高上戸

活舞酒に 以て 舞高上戸の 郡 画水

保原

居眠上戸

居眠 上戸 射牛

業折

軽薄上戸

将を 具て 此 藝を あふく 園扇 哉 左 溪

右 上

盗人上戸

盗人の名もたて 雛のゆきと 酒
二

そと、新と 理庵と 飯小と 四と 三
左 溟

自惚上戸

掛田

急黄 頂海 上戸の 義の 自惚 下那
二 流

眼上戸

瀬上

〜み 上戸 すら さん 後 汁
麦 陵

すき 免 上戸

梁川

藤 上戸 義と 書と 山 美の 雨
川 安

證 上戸

以 上戸 以 妻と けと やと 上戸 の 那
英 婆

口 利 上戸

日 笠と けと 涼と 上戸 の 妻
一 之

田 免 上戸

酸 上戸 出 白 見 聞と 咄と 年 の 言
昇 婆

嘔 吐 上戸

酒 好 上戸 上戸 上戸 上戸 上戸 上戸
遊 婆

波岸邊 叢生寺所とさういへば 舞

姫宮 二州

河津の 小判 ぬまの 舞

皆美 積と 出ぬ 平水 噴水

下野

余興

人々 下野 一と 螢のり 赤うね 三保

燈籠 山や 三本 並 南楚

芳氣に 牡丹を まつて 水より 香風

山より 一つ 拾て 壺に 貯る 夢之 芥子

其の 別荘 跡に 志を 伺ひて 祈り

以て 舟に 乗る 舟を 写す 子泣

山吹の 咲く 水の流れ 一笠

藤入や たりや 44 の 壺を 扇

風の 目や 柳の 下 あり 泉

箱の 香や 千の 舟に 水の水 舞

切口の ちり ちり ちり ちり 舞

酒
初より此の成りよかきり

百

我より来りてきり

東武
雪中着

一
甲
下

